

会社の健康診断で「運動不足」と書かれたのが三回連続で、さすがに上司からも運動をしてみたらどうか、と勧められた。

仕方なくジムに通い始め、それが気づけば三ヶ月になっていた。

週三回、定時ぎりぎりに会社を出て、最寄り駅から徒歩五分のビル三階に上がる。更衣室で着替えて、一時間弱、黙々とマシンを回す。それだけのことを、気づいたら繰り返していた。

悪くはない。むしろ、嫌いじゃないかもしれない。運動のあと、少しだけ頭が静かになる感じが気に入っていた。

ただ、ひとつだけ。

シャワーブースだけは、いまだに使えないままだった。

(シャワー使いたいけど、そうもいかないよなあ…)

僕はカントボーイだ。

生まれてからずっとそうで、自分でもそれを受け入れているつもりでいる。普段は問題なく生きていける。男性として働いて、男性として友人と話して、男性として過ごしている。

だけれど、他の人と一緒に裸になる場面だけは、どうしても避けていた。

他の会員と一緒にになれば、体を見られる可能性がある。

それが恐くて、毎回なんだかんだ理由をつけてロッカーで着替えてそのまま帰っていた。

汗をかいたまま帰るのは気持ち悪かったけど、そちらの方がずっとマシだった。

今日みたいに、たっぷり汗をかいた日でなければ。

「うわ、すごい汗かいた。……シャワー、使いたいなあ……」

その日は残業を終えてからジムに向かい、一時間半ほどマシンを使ってたっぷり汗をかいた。

いつも使っているトレッドミルと、それから最近挑戦し始めた背中のマシン。じっくり体を動かしていたら気づけばいつもより遅い時間になっていて、フロアを見回すと客がほとんどいなかった。

無人制なのでスタッフも出入りしておらず、シャワールームの方向から人の気配もない。

これなら大丈夫だ、と思った。

（誰もいない。今日くらいはちゃんと洗って帰れる……！）

ロッカーから念のために置いてあるタオルとシャンプーを取り出して、もう一度だけシャワールームの扉の方向を確認した。

それでも、念のため扉の前まで歩いて行って、中から声がしないか確かめた。シャワーの音もしなかった。

ようやく、ほんと息をついた。

（よかった。本当に誰もいない……）

一番奥のブースを選んだ。他のブースから離れている。念のため二度確認してから、衣類をフックにかけた。

シャワーのコックを捻ると、勢いよくお湯が出てきた。温度を調節して、まず頭から浴びる。

（うわ、運動後のシャワーって最高……！）

今日の汗がさっぱりと流れていく。筋トレのあとのシャワーってこんなに気持ちいいんだ、と少し笑ってしまった。

（なんで今まで使わなかったんだろ……）

いや、わかってる。わかってるけど。

シャンプーを手にとって、髪に馴染ませ始める。泡立てながら目を閉じると、今日の疲れがじわじわと抜けていくような感覚があった。こういう時間を、ずっと他の人と一緒に使えないでいた。ジムのシャワーなんて当たり前のものなのに、三ヶ月間ずっと

避け続けていた。今日みたいに誰もいない時間を見計らって、こっそり使う。それしかできなかった。

そのとき。

扉が開く音がした。

(……え)

手が止まった。

シャワールームの入口の扉だ。ガチャ、と音がして、続いて誰かが入ってくる足音がした。

(……来た。誰かが、来た……！)

心臓が上に跳ね上がった。

頭はシャンプーだらけで、目も開けられない。今すぐブースの奥に縮こまることしかできなかった。足音は近づいてくる。隣のブースの扉が引かれる音がした。

しばらく間があった。

それから。

「……少し、いいかな？」

声がした。低くて、静かな声だった。ブースの外から、こちらに向けて言っているらしかった。

「な、なんですかっ……！」

目を閉じたまま、できるだけ短く答えた。声が少し上擦った。

「シャンプーが切れてしまって。少し分けてもらえないかな」

（シャンプー……貸してくれって……）

シャンプーを渡すということは、扉を開けてそこに立たなければいけない。あるいは相手がこちらのブースに近づいてくる。

どちらにしても、僕の体が見える可能性がある。
手の中に確かにシャンプーがある。さっき手に取ったシャンプーが、まだ手の中にある。

心臓がどくどくと鳴っていた。ダメだ。それは絶対にダメだ。

「すみません、も、持ってないです」

嘘をついた。手の中にシャンプーを持ちながら。
声が硬くなるのを抑えられなかった。

「……本当に？ 少しだけでいいんだ」

「い、嫌です！」

我ながら感じ悪いとわかっていたけど、それどころじゃなかった。シャンプーの泡がまだ髪に残っていて、早く流したかった。早く終わらせて、相手が